2012 年度事業報告

NPO 法人日印交流を盛り上げる会

2012 年は日印国交樹立 60 周年として、日印両国間で様々な交流事業が行われた。NPO 法人日印交流を盛り上げる会代表長谷川時夫は、1 月 16 日にインド大使館で行われた第 1 回 60 周年事業アドバイザー会議に参加、その後 60 周年事業の主催・共催・協力・アドバイス等多岐に関わり、この 60 周年事業の一翼を担う。アドバイザー会議は一度開かれたのみであったが、個々の参加者の交流によって、いままでの日印交流ではなかったような国内事業（漫画によるインド紹介を日本の全小学校に寄贈、東大寺で菩提僊那継承事業）も行われることとなった。当会は 24 年度の 2 月に 60 周年事業として、インド大使館の依頼に応え、ICCR 派遣オリッシー舞踊公演を開催した。この公演を皮切りとし、60 周年事業がスタートした。当時、事務局のあるミティラー美術館は４ｍちかい雪に埋もれていた。

① ICCR 派遣、ヌルッティヤーヤン Nrutyayan オリッシー舞踊公演（14 名、5/25-5/30）

インド大使館として当初考え、アドバイザー会議にも出されていた東大寺で行うオリッシー舞踊公演は、日本のスポンサー（インド政府はローカルスポンサーと呼び、日本国内の経費を持つ協力者のこと）を見つけられなく流れてしまう。代わりに、経団連ホールで行われる経済催事に派遣される舞踊団をということになるが、実現が困難。微力ながら当会が協力し、実現した。この過程を経て、8 月の東大寺での奉納音楽が可能となる。オリッシー舞踊団は、仏陀のストーリーを基とした新作を東大寺中門で奉納。1276 年の時を経て、日本に初めて来たインド人、東大寺大仏開眼式を聖武上皇に代わって務めた偉大な僧、菩提僊那をインド政府が 60 周年事業として公式に継承するということが実現。参加したアロック・プラサードインド大使、ヴィカス大阪・神戸総領事からも歴史的という言葉が発せられる。奉納舞踊の時、突然空には暗雲が立ちこめ、雷鳴が轟く。インドの美術史家の准教授は背筋がぞーっとする体験、神秘的なものを感じたと言われた。

日時	内　　容
5/25	スペース・オルタ（新横浜）で公演
5/26	インド大使館 ICC ホールで公演
5/27	新潟市新通保育園で公演
5/29	東大寺・中門で奉納公演
5/29	京都市大谷大学での公演を協力

←
オープニング開会式の点灯式
左から、
プラサード駐日インド大使、
杉田奈良県副知事、
大使夫人、
橋村東大寺教学執事

②写真展仏陀の智慧の道 5/25～5/30（写真展会期）
（5/29 ビノイ・ベール氏の講演とビデオ映画上映）

インドを代表する仏教寺院の写真家として著名なビノイ・ベール氏の写真展を築地本願寺本堂で、5 日間にわたり開催。これもまたローカルスポンサーが得られないままなんとか実現した。本堂の会場費は 1 日 300 万円くらいと言われている。たまたま一部改修中のため本格的に使用されていなかった時期と重なり築地本願寺のご協力で実現（延べ 7 日間）。会場に相応しいパネルをということで、ミティラー美術館の持つ出張展用のパネル（270cm×180cm）の布を張り替え、設置。私共の 60 周年事業に助成した新潟コロナの内田社長からもとても立派な展示だったと評価された。プラサード大使の意向で、せっかく広い会場なのだから日本の写真家も参加できないのかという提案があり、松本榮一氏の写真も展示。8 月の東大寺での催事にも縮小して同様の写真展を行う。交流した二人の写真家は、翌年の 1 月、デリーのインターナショナルハウスで写真展を開催することとなる。この時使用されたパネルは東大寺でも使用。パネルの再生は労苦が伴った。雪深いミティラー美術館は雪掘りのためにトタン屋根はしばしば雨漏りに見舞われる。大切に保管していたパネルも例外ではなく、雨にあたり、その多くはカビも生え、見るも無惨な状態。しかしながら、美術館レベルで使用可となるパネルだけに、しっかりとした作りとなっている。布専門店の集まる鶯谷の問屋で布を安く仕入れ、パネルに合わせ裁断、縫製。大きくて重たいパネルを倉庫からリニューアルするために美術館に運び入れるにも、パネルバントラックをレンタルし、4～5 人で搬入。1 枚のパネルは 50 箇所以上大きなホッチキスで止めてある。それを抜くのも大変な作業。新しい布をかぶせて止めるのも大変。それをトラックで築地本願寺へ搬入、高い階段を二人で運び上げるのも大変（50 枚）。設置も自立型でないため、一枚一枚ビス留め。倒れないように一寸角材、紐等を使い設置（十日町の大工が参加）。本堂はお参りに来る人がいるため、パネルの背面が見える所はすべて布を現場で画鋲止め。撤去も同様な手間がかかった。日本とインドの国家催事に相応しい写真展を多くのボランティアや尽力により、またミティラー美術館の協力で、この写真展ができた。また、パネルに関しては特に古いホッチキスの針を抜くという大変な作業（抜かれたホッチキスの針の山が洗面器一杯となった。）ミティラー美術館にアーティストインレジデンスで滞在していた先住民族ワルリーのサダシ、ゴルカナ両氏が協力した。

写真家ビノイ・ベール氏

③モニーシャー・ナーヤク カタック舞踊公演（6 名）（6/21-6/25 協力）

東洋大学の印哲の学生、先生方が動き開催。その後、大学として 10 月 3 日カラリパヤット公演、10 月 26 日プルリア・チョウワークショップを開催することとなる。

ケーララ州のコミュニティのラタジャトラ（山車祭）の催事に時間的なタイミングが合い、参加することができ、この祭に参加された一般の方々やインドの人々との交流を盛り上げることとなった。当時長谷川は能公演の準備でインドに渡印。長谷川むんなが代役を務める。

日時	内　　容
6/21	東洋大学井上円了ホールで公演
6/22	インド大使館 ICC ホールで公演
6/24	ラタジャトラ（山車祭）2012 の公演に協力

④「日印交流のはじまりと未来」～1276 年の時を経て、インド僧 菩提僊那を継承する～　（8/11-8/13）

（インド舞踊公演、講演会、パネルディスカッション）

5 月の東大寺中門での奉納舞踊を通して、広大な敷地を持つ巨大な寺の威容を知ることになる。菩提僊那は、平安末期より東大寺では、盧舎那仏本願の聖武天皇、開基の良弁、勧進の行基と共に、導師の婆羅門僧正として四聖として祀られてきた。その菩提僊那をインド政府が継承する催事をするということで、5 月以来東大寺に協力していただくようになる。しかしながら日中は全国からの参拝者、観光客で賑わう。夜扉を閉められる中門から木造建築としては世界一の大きさを持つ大仏殿までの広い参道、この施設を時間外に貸し切りの状態で使用しようとすると、国宝の建物内での催事はとてつもない予算がなければ可能ではない。この 8 月の催事が可能となったのは、プラサード大使とヴィカス総領事の熱意に、東大寺および当会が呼応して奇跡的に低予算で実現することとなった。8 月 13 日大仏殿で 7 時から東日本大震災特別法要が行われ、その後、声明

の源流とも言えるドゥルパッド声楽のワシフディン・ダーガルが派遣されて奉納。ヴィカス氏はもちろんのこと8月8日に赴任したワドワ新大使も参加して行われた。中門では奈良県主催のライトアッププロムナード・なら「ライトアップコンサート」の一環として、東大寺のイベントの一つとして開催。東大寺ミュージアムにある金鐘会館ホールでの公演とパネルディスカッション他、展示室では写真展。関係する当会やボランティア、ダーガルの一行は宿坊に格安で泊めていただき、この催事を無事終了。また菩提僊那のお墓がどこかにあると言われている霊山寺で、寺の協力によりダーガルの奉納公演を行うことができた。

←
新任のワドワインド大使、
ヴィカス大阪総領事も参列された。

① 8月11日～12日・東大寺総合文化センター 金鐘会館小ホール
写真展「仏陀の智慧の道」撮影ビノイ・ベール
特別展 示松本榮一　監修：東方学院長 前田専學

② 8月11日・東大寺総合文化センター 金鐘会館金鐘ホール
松本榮一（写真家）講演とビデオ映画上映
インド古典舞踊/小久保シュヴァ（バラタナーティヤム）、ナリニ・トシュニワル（カタック）、大谷紀美子（バラタナーティヤム）

③ 8月11日・東大寺中門
ライトアッププロムナード・なら「ライトアップコンサート」
日印国交樹立60周年記念事業　盧舎那仏へ奉納「インドの声楽と舞い」（天平勝宝四年、インド僧菩提僊那 大仏開眼の故事にちなみ）
小久保シュヴァ（バラタナーティヤム）、ナリニ・トシュニワル（カタック）、大谷紀美子（バラタナーティヤム）、ワシフディン・ダーガル（ドゥルパッド）

④ 8月12日・東大寺総合文化センター 金鐘会館金鐘ホール
講演会　ワドワ インド大使ご挨拶、前田専學（東方学院長）「日印の交流」、森本公誠（東大寺長老）「菩提僊那と東大寺」
パネルディスカッション「日印交流の未来へ向けて」
パネラー：サンジャイ・パンダ （インド大使館首席公使）、遠藤和巳（外務省南西アジア課上席専門官・日印国交樹立60周年担当）、東山光秀（霊山寺上院）、常盤勝範（壷阪寺住職）、司会進行：長谷川時夫（ミティラー美術館館長）

⑤ 8月12日・霊山寺本堂（菩提僊那のお墓・霊山寺奉納）奉納音楽　ワシフディン・ダーガル（ドゥルパッド）

⑥ 8月13日・東大寺大仏殿（東日本大震災慰霊法要の後）奉納音楽（ドゥルパッド音楽）

日時	内　　容
8/11～12	東大寺・金鐘会館、舞踊公演、写真展、講演会
8/11	東大寺・中門「ライトアップコンサート」で公演
8/12	霊山寺本堂で奉納公演
8/13	東大寺大仏前で奉納公演
8/16	ワシフディン・ダーガル インド大使館 ICC ホールで公演

⑤観世流（能）インド公演（22 名）

8 月 24 日ニューデリー公演、8 月 27 日バンガロール公演

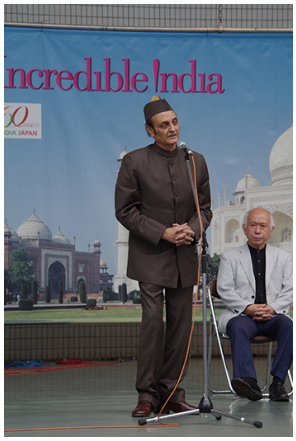
一昨年、国際交流基金の協力で十日町市の懐メログループのフルバンドがインドに行き、インド人演歌歌手チャダが歌うというインドでの本格的な演歌公演を 3 か所行った縁で、デリーの日本大使館から電話があり、60 周年事業に国際交流基金に何か申請してほしいと要望が舞い込む。震災後であることを考え、官邸が募金活動に対してネガティブだということだ。周年事業は相互互恵ということで、インドでは日本政府が行う。日本商工会議所が募金窓口になり関係機関を動かし、日本大使館を中心としながら幾多の催事が行われるのが通例。そのような催事が見通せない中での依頼だった。二国間交流ではウケを狙うイベントのみならず、多様な文化紹介、特に日本の誇る文化を紹介するのが望ましい。その意味で当会は、観世流の家元を含む能公演（4 か所）を立案。インドに活躍する日本企業の殆どの人が能を見たことがない状況の中、パートナー企業を含み、チケットを買い、公演を見ていただき、ユネスコ世界無形文化遺産日本第 1 号の本物の能を体験し、厳しい環境下にある能に少しでも協力するという企画。申請し受理された。その後、年が変わりレアアース等の協力などインドの重要性が増し、募金活動が急遽開始されることとなる。1 億円の目標（1 億 2,000 万集まる）で 12 月の 60 周年のファイナルのイベントとしてデリーのインド門で花火をレーザー光線を交えて打ち上げることとなる。当会への日本企業からのサポートは難しくなった。公演を 2 か所に絞り、インド進出企業以外のところからの協力を仰ぎ、大きな赤字となったが、開催することができた。評価にはいろいろな基準があると思うが、両国で観世清和（26 世）氏、ワシフディン・ダーガル（20 世）という世界でも他にはバッハ家と称されるほどの長い伝承を持つ両国を代表する深い伝統文化を 60 周年事業の（目玉）として、多くの関係者の協力のもと開催できた。

日時	内　　容
8/24	インド・ニューデリー FICC ホールで公演
8/27	インド・バンガロール 州知事公邸グリーンハウスで公演

⑥ナマステ・インディア 2012（9/22、9/23）

フォークアートの広場ではパタチットラアーティスト（3 名）（9/21～10/11）

インドへの進出が遅れているのは相手の国の文化を知らないとか、興味がないとか、知る機会がない、ということにも関係している。オペラが好きになればそこに行ってみたくなるだろう、そのような側面を言われた、日印経済委員会の委員長山下英明氏は故清好延氏とナマステ・インディアを 1993 年に始められた。この名称を付けたのが清氏。文化だったら新潟の森の中にいる長谷川さんということで、協力した。2005 年から主幹として当会は日本商工会議所より引き継いだ。その後、インド大使館と共催のイベントとする。2 年前には大使館よりロンドン、ニューヨークを超え、インド国外では世界最大のインドフェスティバルと公言してよいと言われる。2 日間で 20 万人規模のイベントとして成長。このイベントにインドの重要閣僚 ICCR 会長カラン・シン氏が参加された。半年前に既に決まっていたらしく、情報が入ってきても本当なのか確認できなかったが、実現となった。昨年は不況の煽りを受け、外貨の不足に見舞われたインド政府は予算カットに動いた。ナマステに参加しているインド政府観光局も参加協力する予算をカット。ICCR は 60 周年事業に対しても、インド大使館の要望になかなか答えてこなかった。派遣する音楽・舞踊グループを世界相手に取捨選択しカットしようとしていたようで、それでなくても情報と決断の遅い ICCR によって受け入れる側として今までにない最も困難な状態になっていった。7 月末、インドでカラン・シン氏にお会いし、協力を要請する直談判をする。その最たるものは、結論のでない国立劇場おきなわのボリウッドグループの派遣、第 2 に東大寺のダーガル派遣、他ナマステのフォークアーティスト派遣、10 月のプルリア・チョウ派遣等について。滞在を二度延期し、お会いしていただき、東大寺と沖縄は快諾をいただいたが、プログラムディレクターの段階になると予算カットの影響を説明され、日本側の協力を求められた。結果、ダーガル、ボリウッドの



祝辞を述べられる ICCR インド文化交流評議会会長カラン・シン氏

ギャラは日本持ち、大使館での公演は ICCR 持ち、他はいつも通り。また、ナマステのフォークアーティスト派遣、10 月のプルリア・チョウ派遣はカットされた。（ナマステへベンガルからパタチットラ 3 名のフォークアーティストを現地の NGO Banglanatak dot com の協力を得て招聘、また、10 月のプルリア・チョウも同じく Banglanatak dot com の協力で 9 名招聘することとなった。）カラン・シン氏の日本滞在中 3 日間の歓迎会、職員パーティに出席、交流を深める。ナマステの当日は、東大寺よりお借りした原寸大の大仏の左手を見られ、菩提僊那の英語の解説をしっかりと読まれ、驚かれる。ナマステの 2 日間は雨もあったが、びっくりするような人出で、多くの人に待たれているイベントだと参加者からも声が上がる。

⑦平取アイヌ文化保存会 ナマステ・インディア 2012 ステージ公演（12 名）（9/22、9/23）

二風谷村から(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構の協力を得て、ナマステに参加して５回目となる。A３二つ折りカラーのリーフレットを制作し、本部、受付、案内所で配布。二日目のステージ会場では、傘をさしながらＩＴ関係の仕事をしているインドの若者二人が一人一人に配っていたのが心に残る。ステージ担当スタッフ、PA 関係者らは、特に交流を深めている。当会の長谷川と平取アイヌ文化保存会の貝澤氏二人は本部裏の隅で初めて長い時間語り合うことができた。それが来年度（2013 年度）の観世流能インド公演の次のプロジェクトにつながった。

⑧カラリパヤット公演　（10 名、9/21-9/27、10/1-10/4）

ナマステ・インディアに派遣されたカラリパヤットは先のインドの国情とは関係なく、60 周年事業の目玉に位置づけられ派遣された。それだけに大使館も積極的に動き、各地で開催される。カラリパヤットは武術と医学アーユルヴェーダ、両方を併せ持つ。人類が狩猟し傷つき、傷を治す医が共に発達したことを思わせるような、古式というよりは原始につながるような古い伝統を感じさせる。彼らのメッセージでも禅の始祖達磨は中国少林寺にカラリパヤットを伝え、少林寺拳法になったと語る。ケーララ州を中心として今日に伝わるこのカラリパヤットは現地では土を掘った地下の冷えた環境でトレーニングされる。今回のグループは

デリーから来たそうで、リーダー以外は菜食ではなかった。多様な武術を次から次に音楽に乗せて披露するスタイル。それらを日本の聴衆の立場に立ってアドバイスし、他の踊りも入れ、1 時間ほどのプログラムを創り上げた。各地で成功したが、神戸のインドフェスティバルメーラーでは、彼らだけの判断でプログラムを組んだことと、グループ曰く食事のケアが不十分、１日２回の公演、１回の公演時間の長さ(1時間)等もあり、良くなかったいう評判をプルリア・チョウに感動した主催者からも聞いた。予算を持たない大使館が各地への売り込み、企画専門ではないので宿泊・滞在・移動と細かな約束事の行き違いや当初の曖昧な交渉によって、様々な問題が発生した。例えば、一つの会場が上記のようなことが理由でキャンセルとなる。空いたスケジュールを担うだけの予算がない状態。当会は、復活の打診、協力することで復活することとなる。結果、当会の企画以外の所への旅費、宿泊へのサポート等を実施。関東での宿泊は群馬県の光恩寺が協力してくださった。二国間交流というのは、尖閣諸島ほどではないが、問題が生じる。まず空港に着いた彼らの武器は取り上げられる。前もって警視庁も含み、大使館も地元警察と連絡を取り合っても、現物を見ないと許可が出ない。代理人はだめで、ナマステ・インディアの実行委員長として前日の準備で多忙極める当会の長谷川が成田の空港警察署に受け取りに行くことになる。翌日書類作りのために大使館の地元赤坂警察署に大使館職員と共に許可証をもらいに行く。出来上がるまで２時間近く、それでも担当官は事情を察して時間を短縮する努力をしてくださる（ナマステの初日)。許可証は彼らと共にインドに行ってしまい、大使館職員の何度かの手紙のやり取りで 5 ヶ月後大使館の元に戻る。身元保証人本人でないとだめということで、代理のための委任状書類を大使館に送り、職員が返納してこの武術のための道具の一騒動は終わる。彼らの演舞は、オリンピック並に発展、精錬されている日本の武術とは異なり、素朴さが漂う。それだけに珍しさがあっても魅力に乏しい。枝分かれし発展する武術以前の良さもあり、棒術、組み手、拳法、剣術、槍など多様。試合最初と最後の挨拶、ステージ上で最初に全員がグルに挨拶。終了しても同様なことを繰り返す。しかも一人一人挨拶の仕方が異なると言ってよいほど、個に任されている。その何とも言えないソフトな師に対する仕草が見る者の心に感動を与える。目玉の演舞は、２センチ幅、長さ３ｍの薄いゼンマイのような鞭状の武器を両手に持ち、時にはその長い鋼がヘビのように上半身裸の演舞者に巻き付く。激しく床を打つときの音、両手に持ったその武器を二人組で演舞するときは、鋼のぶつかり絡まる音、怖いような、危険を感じさせる演舞。終わった時にはほっとしたように大拍手となる。2008 年に建てられたインド大使館のホールにあるステージは固い床でないために、いくつも傷がつき、他の場所でこの演舞をやらないようにという指示が出

る。大使館では全力で演舞をしたせいなのか前列に折れた剣が飛び込むハプニングも。以来、最前列は客席を空けることになる。その後は一切危険な問題はなかったが、知事も動いて北日本新聞社主幹の経済界を巻き込んだ富山インド協会２周年のイベントに際しては最終的に現地主催者の判断でこの演目を紹介。ステージの床もさほど傷つかなかった。神戸の不評にはこの演舞が行われなかったことと、時間が長すぎたことが一番の原因。それとリーダー以外菜食でないといっても、豚、牛は食べられない人たち。そのような配慮がないと、身体の大きい者、若く意気盛んな者など、腹を空かしての演舞となる。簡単なことを相手に吐露できるような関係作りがないと国際交流は難しい。

日時	内　　容
9/22、9/23	ナマステ・インディア 2012 野外ステージで公演
9/24	インド大使館 ICC ホールで公演
9/26	富山市・北日本新聞ホールでの公演（富山インド協会）に協力
10/3	東洋大学で公演
10/5	石川県野々市・市文化会館フォルテでの公演（石川インド協会主催）に協力

⑨プルリア・チョウ舞踊公演（9 名、10/4-11/7）

ほぼ確定に近かったプルリア・チョウのインド政府派遣は、予算カットの波を受け困難となる（７月末）。インド大使館とフジテレビが長い話し合いのもとに計画されてきた応援プロジェクト、東松島避難所の仮設住宅の側にある旧武道館を使ったこの企画が暗礁に乗り上げてしまった。このグループが来ないと刈谷市のナマステ・インディア、在日インド人のベンガル協会の祭り、各地のインドフェスティバルも無理となる。インド NGO バングラナタックドットコムの協力を得て旅費と滞在費を当会が負担、謝礼・事前準備はインド側、宿泊はミティラー美術館の元教員宿舎で自炊、移動はカラリパヤット以降の 60 周年事業のために中古のバス（80 万）を購入という大枠で実現し、今まで協力できなかった各地のインドフェスティバル、ほぼすべてを網羅するプロジェクトとなる。

日時	内　　容
10/6	（宮城県・東松島市矢本運動公「武道館」）日本・インド友好 60 周年記念 フジテレビずっと応援。プロジェクト IN 東松島に協力
10/7	刈谷市総合文化センター ナマステ・インディア in 刈谷での公演に協力
10/8	インディアンメラー（神戸市メリケンパーク）で公演

10/13、14	ディワリ in 横浜フェスティバル（横浜山下公園）での公演協力
10/20	東京大田文化の森・東京ベンガル協会ドゥルガー祭での公演協力
10/20	インクレディブルインディアフィエスタ 2012（築地本願寺）での公演に協力
10/26	東洋大学で公演とワークショップ
10/26	インド大使館 ICC ホールで公演
10/27	東京西葛西新田 6 号公園・葛西ディワリフェスティバルでの公演に協力
10/28	群馬県邑楽郡・光恩寺 秋季大祭で公演
10/29	十日町総合体育館武道場、子ども空手・柔道 交流と公演
11/1	兵庫県宍粟市・はりま自立の家（障害者支援施設）慰問公演
11/3	奈良市・霊山寺で奉納公演
11/4	広島市・光明寺で公演

⑩ボリウッドダンス公演　ペナーズ・マサーニー歌と踊り（12 名、11/23-11/30）

沖縄の国立劇場はチケット販売に向け動くもグループ名が決まったのは、10 月 30 日、公演は 11 月 25 日。劇場が作る冊子にはボリウッドということで板倉リサさんが自分の体験を通した文章を寄稿。宣伝のためのチラシ等あらゆる所に不具合が生じるが、劇場は懸命に動員のための動きを加速。当日 632 席ほぼ満席になる。招待客がどれ位かとか心苦しくて聞いてはいないが、打ち上げの席で理事長はじめ主要な方々が喜ばれていたところを見ると成功したように思える。ガザルの女王といわれるペナーズが 2007 年の日印交流年に来日した時（当会のオーガナイズ）に覚えたスキヤキソングを日本語で見事に歌い、会場にマイクを向けて一節一節を交互に歌うなど、その歌の見事さと親愛さが人々の心を打つ。バックの若者たちのダンスも躍動感と洗練さが衣装と共に素晴らしかった。この企画はもともと一昨年の 10 月か 11 月頃に、60 周年記念事業として既に決まっている翌年度の企画を一つ壊し、インド政府が送る素晴らしい芸能を 5 年前の日印交流年のカタカリの時の様にやりませんかという長谷川の問いかけに、断ることもなく、数日待ってほしいと言われた後に、一つの企画を壊して参加したもの。しかしながらインド側からすれば、1 公演のみに派遣するのは難しく、後の公演、新潟、福島、大使館での公演等の実現が必要だった。1 公演のギャラ（薄謝）、2 公演分は大きな負担となる。新潟市では福島から避難している方々全員に招待状の案内を新潟市の協力で配布。福島公演では飯舘村の人々が参加できるように現地の NPO ほうらいがマイクロバスを用意。当日はパンダ次席公使夫妻も参加。福島の会場では客席にまで下りていったペナーズが、古老の誰も歌えないような地元の民謡を一節一節見事に真似ると感動の拍手となる。情報も遅く、残念ながら参加人数も少な

かった。それでも若い参加者の男女や子どもたちがステージに上がり、ペナーズ、ダンサーと共に踊った。飯舘村から福島市に避難せざるを得なかった人々にとって良い交流となったのではないかと思う。

日時	内　　容
11/25	国立劇場おきなわでの公演に協力
11/27	新潟県民会館小ホールで公演 （東日本大震災後、新潟市に避難している人々を中心に）
11/28	福島県文化センターで公演 （飯舘村から避難している人々を中心に）
11/29	インド大使館 ICC ホールで公演